

霧隠軒より折々によせて（第五回）

『欲しい狂気の熱、冷ます涼風』

禅門では夏の坐禅は「犬も喰くわぬ」と言われている。何でも口にする犬さえも、これには見向きもしないということだろう。

着物の上に衣を着る。夏はそれだけで汗が出る。今年の夏は又格別である。汗の中に身体からだが入っていると思える程ほどである。

しかし、修行者はこの中で「ウンウン」と唸うなるように坐らねばならぬ。

面白いことだが、この熱気から逃げられぬと覚悟して汗を流すだけ流すと、時に不思議な体験が訪れる。

汗が首筋や脇腹わきばらを通って脚まで流れ、坐っている単布団までぐっしよりと濡ぬれる。

それでも坐って坐り抜く者が居る。それこそ彼は汗の中にどん坐る訣だ。すると「ふっ」と汗が消え、熱が失せ、ベタベタしていた肌に爽やかな風が吹き、嘘うそのように

清々としてしまうのである。

同様に坐禅に集中、つまり禅定が深まった例としてこんなことがある。

昔、ある泥棒が旅籠はたごに忍び込み、客の中着きんちやくを盗んでいった。もう一つとばかり次の部屋を覗のぞいた。夜も更けているが、闇やみを透して部屋の中が良く見えるのはその道のプロ故だ。

しかしこの泥棒、押し入った途端「ワァー」と叫んで、そうして腰を抜かしたようにへたり込んで後ずさりしてきたのである。

もちろん宿の主人や泊まり客も皆眼を覚まし、何事かと駆けつけたが、そこには件くだんの泥棒が「アレアレ」と肝を抜かれたように部屋を指差しているのであった。

そうしてその指の先、部屋の内には一人の出家僧が端然たんねんと坐っていた。

役人が来てこの間抜けな泥棒を捕縛とらひくし、一体どうしたのかと質ただしたところ、「へい、ここに忍び込んだら、部屋と思ったのは大間違いで、真ん中に大木が生えていて、そ

りやびつくりしたのなんの」と言う。

余りおかしなことを言うものよ、と役人が次いでこの部屋の僧に尋ねると「いや部屋には拙僧せつそう一人で別に何もないが」と答える。

だが何故泥棒の眼にそう映ったのか、役人が更に問うと「なる程、それは拙僧が坐禅を組んで専一に、『柏樹子の話』という公案を拈提ねんていしていたので、それできつとその柏の木に成り切っていたのであろう」と言うのだ。

もちろん、これだけの説明では理解が困難であろうが、兎も角も究極の坐禅では、対象と一つに成り切っているということなのだ。

さて、ここで視点を泥棒に移してみる。

小柄わたしはこの逸話を紹介しながら、彼がこの日を境に人が変わったと想像している。つまり、心を入れ替えただけではなく、この僧の弟子になったのではないかと。

それは先に坐禅中の涼風の体験を述べたが、それと同じようにこの瞬間大木から涼すいやかな風が吹いて、泥棒の心の熱が一気に消え失せたのだ。それこそ彼は既に世の

熱に狂える人ではなくなったのだということだ。こんな  
風が今の世の中には本当に欲しい。